

## 『無秩序の仮面』における言説の変移

藤 田 幸 広

### 序

「私がイタリアで眠っているときに」イギリスで事件が起こった。1819年8月16日、マンチェスターにあるセント・ピーターズ広場で、選挙法の改正、穀物法の廃止、そして議会の改革を訴える6万人もの民衆とそれを弾圧しようとする民兵や騎兵が衝突し、多くの死傷者を出した。「ピータールーの虐殺」(Peterloo Massacre)といわれる事件である。その頃のヨーロッパは、フランス革命の挫折とナポレオン戦争を経て、情勢をフランス革命以前に戻そうとするウィーン体制が成立した後であった。ウィーン体制とは保守反動体制に他ならず、労働者階級を主とする民主化運動を鎮静化しようとする不穏な社会状況の中でこの事件が起こったのである。イタリアに移住していたイギリス・ロマン派の詩人シェリー(Percy Bysshe Shelley)は、同年9月5日に友人ピーコック(Thomas Love Peacock)から送られてきた手紙を通じてその事件を知ることになる。<sup>(1)</sup> この事件の直接的な発端や事実関係については様々な議論があるが、9月6日の出版業者オリアー(Charles Ollier)宛の手紙の中で「噴き出す怒りが血管の中で煮えたぎって止まない」<sup>(2)</sup> と言っているように、シェリーがこの政治的弾圧に対して激しい憤りを感じたのは事実である。それと同時に、1813年に出版された『クイーン・マブ』(*Queen Mab*)の執筆以来、詩という表現媒体を通じて社会改革を訴えてきた彼にとって、<sup>(3)</sup> このピータールーの虐殺が詩を書く格好の題材となったのはいうまで

(1) シェリーの伝記的背景については、Newman Ivey White, *Shelley*, 2 vols (London: Secker and Warburg, 1947) 並びにRichard Holmes, *Shelley: The Pursuit* (London: Flamingo, 1995) を参照した。

(2) Percy Bysshe Shelley, *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, ed. Frederick L. Jones, 2vols. (Oxford: Clarendon P, 1964) 2: 117.

(3) シェリーは、『クイーン・マブ』執筆以前にイギリスの専政に苦しみアイルランドに赴き、カトリック教徒解放運動という「直接的な」政治活動をしている。

もない。「私がイタリアで眠っているときに」<sup>(4)</sup>で始まる『無秩序の仮面』(*The Mask of Anarchy*)が書かれたのはこのときである。

詩というものは自己の想念や感情の具現化であり、意識的に読者を想定しなくても書けるものである。しかし、『無秩序の仮面』は疑いもなく読者の存在を念頭に置いて書かれた作品である。そしてその読者とは、政治家や聖職者や貴族という上層階級のエリートたちではなく、労働者階級の(詩を読むことに慣れていない)「民衆」である。シェリーが「民衆」という読者を念頭において詩を書いたという事実は、『無秩序の仮面』を分析する上で重要な意味を持っている。本論では、まずその理由を述べた上で、「民衆」という読者を想定して書かれた『無秩序の仮面』における言説の変移について考察してみる。

## I

1818年の春にイタリアへと渡ったシェリーは、自分の趣味(taste)に合った哲学的かつ抒情性豊かな詩的表現の術を確立していくことになる。<sup>(5)</sup> ピータールーの虐殺が起きた年、すなわち1819年は、そんなシェリーにとって多くの傑作が生まれた年であり、「驚異の年」(*annus mirabilis*)といわれている。中でも、自己の社会改革の理念を神話世界の中で体現した詩劇『鎖を解かれたプロメテウス』(*Prometheus Unbound*)は彼の最高傑作といっても過言ではない。社会改革というテーマは、イギリス滞在時代に執筆された『クイーン・マブ』や『イスラムの反乱』(*The Revolt of Islam*, 1817執筆)という長編詩を例に出すまでもなく、シェリーの詩の根幹を成す重要なファクターである。しかし、1819年に書かれた『鎖を解かれたプロメテウス』と『無秩序の仮面』を比較した場合、「読者」の設定という点に大きな相違が見られる。

『鎖を解かれたプロメテウス』は1818年の初秋から執筆され、完成まで約1年半という年月を要した。もちろん、この詩が全4幕からなる詩劇であることも執筆期間の長さに影響しているが、この期間の中でシェリーは、不穏なヨーロッパ情勢を念頭に置きながら、詩という表現媒体を通じて改革の理念をどのように表現するかについて十分考える時間があった。その序文の中でシェリー自身が言っているように、この詩が表現するのは「道徳的に卓越した美しい理想主義」であり、その対象となる読者は「高度に洗練された想像力」を持つ「詩的な読者の中でもより選ばれた階級」<sup>(6)</sup>である。ま

(4) シェリーの詩の引用は、Percy Bysshe Shelley, *Shelley's Poetry and Prose*, ed. Donald H. Reiman and Neil Fraistat, 2nd ed. (London: Norton, 2002)からの拙訳で、括弧内に行数を記した。尚、翻訳の際、上記のNorton版の他に、Percy Bysshe Shelley, *Selected Poems*, ed. Timothy Webb (London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1977)とPercy Bysshe Shelley, *Selected Poems of Percy Bysshe Shelley*, ed. Tatsuo Tokook (Tokyo: Hokuseido, 2007)の注を参考にした。

(5) その要因として、イギリスとは異なったイタリアの風土の他に、古代ギリシアの哲学者プラトン(Plato)の影響が考えられる。シェリーは1818年7月に彼の『饗宴』(*The Symposium*)を翻訳している。

さにこの言葉を裏づけているかのように、『鎖を解かれたプロメテウス』は「共感覚」(synesthesia)や複雑な比喩表現、そして「深遠なる真実はイメージを持たない」(II. iv. 116)という言葉に象徴される難解な哲学的表現が散りばめられ、読者をシェリー独自の遠い地平へと誘う言説が展開されている。事実、この頃からシェリーは自分の理想に傾倒した詩を書く傾向にあった。それは私的で内面的な題材が多いということだけでなく、表現方法においてもいえることだった。読者の受容という点から見ても、彼の友人にして『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage*)によって時代の寵児となっていたバイロン(George Gordon Byron)と比較すれば、シェリーに対する読者からの評価の乏しさは一目瞭然だった。特に、『鎖を解かれたプロメテウス』は、当時の読者の志向を排除したあまりにも純粹すぎる作品となって完成したのである。お気に入りの作品にもかかわらず、「『プロメテウス』は20部以上売れないだろう」<sup>(7)</sup>と言っているように、誰よりもシェリー自身がその性質を自覚していた。

一方、『無秩序の仮面』は、いわばピーターラーの虐殺に対する衝動的な反応によって書かれた詩である。<sup>(8)</sup>しかし、衝動の産物といっても、短期間で書かれた詩のベクトルは明らかに読者に向いていた。詩が完成するとシェリーは、雑誌『イグザミナー』誌(*The Examiner*)に掲載してもらう目的で詩をその出版者リー・ハント(James Henry Leigh Hunt)に送っている。<sup>(9)</sup>さらに、ある一つの試みがシェリーの中で生まれるようになる。1820年5月1日、リー・ハントに宛てた手紙の中で、シェリーは『民衆のための歌集』(*popular songs*)と題した小さな詩集を出版したいと言っている。この詩集は、「概して政治的であり、改革者たちの想像力を喚起し、導くように運命づける」<sup>(10)</sup>のために意図されたもので、「カスルリーの在任期間に書かれた詩行」(“Lines Written During the Castlereagh Administration”), 「イギリスの人々に寄せる歌」(“Song to the Men of England”), <sup>(11)</sup>「1819年の二人の政治的キャラクターに対する比喩」(“Similes for Two Political Characters of 1819”), 「人々が公平に得るもの」(“What Men Gain Fairly”), 「新しい国歌」(“A New National Anthem”), 「ソネット——1819年のイギリス」(“Sonnet: England in 1819”), 「飢えに苦しむ母親のバラッド」(“Ballad of the Starving Mother”), 「自由に寄せるオード」(“Ode to Liberty”), 「西風に寄せるオード」(“Ode to the West Wind”), そして『無秩序の仮面』の計10編が収録される予定だった。詩集の題名から判断できるように、『無秩序の仮面』の対象となる読者はやは

(6) *Poetry and Prose* 209.

(7) 1820年3月6日、オリアー宛の手紙(*Letters* 2: 174) 参照。

(8) この衝動は、オスマン・トルコに対するギリシア独立戦争に共鳴して『ヘラス』(*Hellas*, 1821執筆)を書いたときよりも強いと思われる。

(9) 1819年9月23日、妻メアリー(Mary Shelley)の日記(Mary Shelley, *The Journals of Mary Shelley*, ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert [Baltimore: Johns Hopkins UP, 1995] 298) 参照。

(10) *Letters* 2: 191.

(11) “England”は本来「イングランド」と訳すべきだが、本論では「イギリス」という訳に統一した。

り民衆であった。このように、同時期に書かれた『鎖を解かれたプロメテウス』と『無秩序の仮面』は「社会改革」という同じテーマで書かれた詩であったが、どのような読者に受容させるかという点に大きな差異があったのである。

それでは、「民衆を対象にした詩を書く」という詩人の意図が『無秩序の仮面』の中でどのように反映されているのだろうか。それは言い換えるならば、「シェリーが通常書いている読者よりも教育を受けていない読者に対して大きな即効性を生む」<sup>(12)</sup> という意図の反映である。まず挙げられるのは形式においてである。『無秩序の仮面』は372行から成り、4歩格 (tetrameter) の対句が2つある4行連を基本にしたバラッド連 (ballad meter) に近い形式で書かれている (5行連が7箇所ある)。この形式は、バラッド調の特性を考えれば、短く容易な句読法で書かれたテンポの良さという「音」の読みやすさ、そして物語詩という「内容」の読みやすさを有している。しかし、バラッド調の物語詩という位置づけでこの詩を通時的に分析すると、途中でそれが無意味になってしまうことが分かる。つまり、たとえバラッド連に近い韻律によって書かれ、一見、物語詩のような形式で書かれていても、『無秩序の仮面』はその枠組みを飛び出し、さらには「言説の変移」という別のレトリックの側面を持っているのである。その大きな要因は、『鎖を解かれたプロメテウス』のような自己の理想とする作品を完成させるほど詩作のスタイルを確立したシェリーが、民衆を対象にしてこの詩を書いたことにあり、筆者は考える。このことを念頭に置きながら、『無秩序の仮面』を見ていくことにする。

## II

『無秩序の仮面』の1行目に登場する主語は「私」である。それはテキスト内のペルソナとして受け止めることもできるが、その「私」がしているのは以下の通りである。

私がイタリアで眠っているときに  
海の向こうからある声がやって来た。  
それは大いなる力をもって  
私を詩のヴィジョンの中へと歩ませた。(1-4)

「イタリアで眠っている」のは、自己の現状を語る書き手、つまりマンチェスターで起こった事件を知る前のシェリー本人という他ない。たしかに、読者の受容を想定した場合、書き手の個人的な現状を詩の冒頭で語ることが果たして有益かどうか疑問が残ると

---

(12) Norton版の解説 (*Poetry and Prose* 315) 参照。

ころである。しかし、ピータールーの虐殺という出来事がイギリスでの政治活動に直接関わっていない「眠っている」自分に「大なる力をもって」詩を書かせたという詩作の動機だけは、シェリーがまず伝えたかったことに違いない。ところが、「私」をシェリー本人ではなくテキスト内のペルソナとして見た場合であっても、「私」の出番はここで終了する。この後、「私」は完全に静的な傍観者となってこの詩を「物語る」ことだけに徹し、いわば「語り手」として姿を消すのである。シェリーは詩の中からあえて自分を退場させ、別の手法を使って詩の展開を試みる。

5行目から、仮面を着けて寓意化されたキャラクターが立て続けに登場する。そのキャラクターたちには直喩を通じて実在する人物の名が付け加えられており、読者を直接刺激しやすいものになっている。最初に登場するのは「殺人」で、彼は「カスルリーのような」仮面をしている（5-6）。名指しされているカスルリー子爵（Robert Stewart, Viscount Castlereagh）は当時の外務大臣で、アイルランドでの過激な弾圧政策や反動的なウィーン体制の支持者として知られている。次に現れるのは「エルドンのように」アーミンの毛皮を着た「欺瞞」で（14-15）、エルドン男爵（John Scott, Baron Eldon）とは当時の大法官、シェリーから最初の妻ハリエット（Harriet Westbrook）との間に生まれた子どもの養育権を奪った人物である。3番目に「シドマスのような」「偽善」が（偽善を象徴する）クロコダイルに乗って通りかかる（24-25）。シドマス子爵（Henry Addington, Viscount Sidmouth）は時の内務大臣、労働者の反発を抑えるために様々な策略を働いた。そして多くの「破壊たち」がこのおぞましいページェントに参加し、彼らは仮面を着けて「主教、法律家、貴族、そしてスパイのように」変装している（26-29）。そして、ついに「無秩序」が登場する。

最後に「無秩序」がやってきた。  
 彼は白い馬に乗って血を跳ねつける。  
 唇に至るまでが青白く、  
 まるで「黙示録」の「死」のようであった。

また彼は王冠を被り、  
 笏を握りしめて見せている。  
 私は見た、彼の額にこのような印を、  
 「私は神であり、王であり、法である！」

堂々かつ敏捷な足取りで  
 彼はイギリスの地を渡っていく、  
 崇敬する群衆を

血の沼になるまで踏み潰しながら。(30-41)

「無秩序」は、「殺人」や「欺瞞」、そして「偽善」のように実在の人物に喩えられていない。それでは、一体何を象徴しているのであろうか。まず、「無秩序」が身に着けている「王冠」と「笏」から判断すれば、当時のイギリス国王ジョージ3世 (George III) が浮上する。しかし、1819年はすでに摂政政治が行われていた時代で、高齢のジョージ3世が死を迎える1年前である。またNorton版の注によると、「無秩序」のイメージはウエスト (Benjamin West) の油絵「青ざめた馬に乗る死」(*Death on the Pale Horse*) を暗示し、「無秩序」という言葉はミルトン (John Milton) の『失樂園』(*Paradise Lost*) やポウプ (Alexander Pope) の『愚人列伝』(*The Dunciad*) からの影響がある。<sup>(13)</sup> しかし、これも民衆という読者を考えた場合、(テキスト内の文学的効果はともかく) どの程度読者に具体的なイメージを抱かせられるか疑問である。もし詩人がそれを検討していれば、「無秩序」は当時のイギリス情勢を描くもっと大きな象徴性を持つかもしれない。ピーターラーの虐殺が起こった頃、まだその惨事を知らないシェリーはイギリスの不安定な状態について語っているが、その中で「より高い秩序の中で変革が始まるべきである。さもなければ無秩序だけが王政の前の最後の閃光となるだろう」<sup>(14)</sup> と、「無秩序」という言葉を使っていた。この「無秩序」(anarchy) とは、「より高い秩序」の対極にあり、民主化に不可欠な思想や運動の自由を干渉し弾圧する保守反動の恐怖政治を意味している。<sup>(15)</sup> もし、『無秩序の仮面』の序盤が民衆を引きつけるという意味で政治性を持ち、またそれがこの手紙の内容を反映しているとすれば、詩に登場する「無秩序」は「王政の前の最後の閃光」、つまり当時の民意を脅かす殺戮の恐怖を象徴化したキャラクターであるといえるのではないだろうか。「無秩序」はイギリスの群衆を容赦なく轢き殺していくが、57行目の「『無秩序』の勝利」(“the triumph of Anarchy”) という表現から分かるように (“triumph” は本来、古代ローマの「凱旋式」を意味する)、恐ろしい仮面のページェントは凱行進のイメージへと変貌していく。<sup>(16)</sup> そのページェントの中で、殺人者たるイギリス軍隊は勝利の讃歌を歌い、血と金を称えるその歌には法律家や聖職者も登場する (58-73)。また、「無秩序」が持つ残忍な「死」のイメージと威厳に満ちた「王」のイメージの二重性は、イギリスの王室や議

(13) *Poetry and Prose* 317参照。

(14) 8月24日、ピーコック宛の手紙 (*Letters* 2: 115) 参照。

(15) したがって、シェリーが崇拜する思想家で妻メアリーの父でもあるウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) のアナキズム (anarchism) の思想から生まれたものではない。

(16) 凱行のページェントが群衆を轢き殺していくイメージは1822年執筆の『人生の勝利』(*The Triumph of Life*) にも使われているが、それがペトラルカ (Petrarch) の『凱行』(*The Triumphs*) からの影響ではないかとホワイトは指摘している (White 2: 105, 630-631参照)。また、Norton版の注ではインド神話のジャガノートの暗示が指摘されている (*Poetry and Prose* 317参照)。しかし、ここでは血と金に溺れる支配者たちに搾取されているにもかかわらず、被支配の民衆が「崇敬する群衆」とアイロニカルに表現されていることに注目しなくてはならない。

会の墮落した現状をアイロニカルに映し出していく。具体的には、皇太子（後のジョージ4世 [George IV]）の放蕩ぶりや、議会在取賄の温床となっていることを暗示している（74-85）。ここに支配者層と被支配者層の構図が浮かび上がり、イギリス社会の緊張状態が生み出されていく。

そして「熱狂した少女」が登場する。彼女の名は「希望」であるが、その外見は「絶望のよう」であり、彼女の父「時間」も弱り果てた姿である（86-93）。しかし、娘（「希望」）と父（「時間」）との間に一つの対照が見られる。「時間」が衰弱した原因は、彼の子供たちが「希望」を除いて次々と死の灰となっていくからであり（94-96）、いつ訪れるか分からない「より良き日」（91）を待ち続けているからである。しかし、娘である「希望」がひれ伏しつつも「忍耐強い目つきで」（100）待っているのは、彼女の前に通る「殺人」、「欺瞞」、そして「無秩序」である。つまり、この場面は、「希望」が（父である「時間」と違って）間近にある存在、つまり「殺人」、「欺瞞」、「無秩序」という「敵たち」（102）と交差するという緊張状態を生み出しているのである。それはまさに、イギリスの不穏な緊張状態、そしてそこから引き起こされたピータールーの虐殺を詩の中で再現させているといってもよい。ところが、これまで続いてきた寓意的ページントの物語は信じられない展開と共に終わりを迎えようとする。

### III

少女とページントの交差は詩に一つの転機をもたらす。それは物語に新しい展開を生むということだけではない。読者の前に突然異空間が訪れたかのように、新しい言説が登場するのである。

そのとき、彼女と敵たちの間に  
一つのもやが、一つの光が、一つのイメージが現れた、  
初めは小さく、弱く、脆く  
谷間の霧のようであった。

まるで雲が突風で大きくなり、  
素早く大股歩きをする塔状の冠を被った巨人たちのように  
飛び散るたびに稲妻で輝き  
雷鳴で空に語りかけるように、

それは成長していった。一つの姿が  
クサリヘビの鱗よりも輝いた鎧を身にまとい、

天気雨の光のような色合いをした  
翼に支えられていた。

その兜の上には、はるか遠く、  
明けの明星のような星があるのが見えた。  
その光は、深紅の露のシャワーのように、  
翼を通り過ぎて降り注いだ。

風のように柔らかい足取りで  
それは人々の頭の上を通り過ぎていった。とても素早く、  
彼らはその存在に気づいて見たが、  
何もない空間しか残っていなかった。

花々が五月の足取りの下で目を覚ますように、  
星々が夜の束ねていない髪から振るい落とされるように、  
波が声高な風が呼ぶときに生まれるように、  
歩みを落した場所すべてに思想が湧き出した。(102-125)

これまでと同様に理解しやすい句読法によって書かれているにもかかわらず、この6連で展開されるイメージは、今までとは異なったものになっている。つまり、この部分は明らかにシェリー特有の表現、いわゆる「シェリーの抒情性」(Shelleyan lyricism)によって構築されている。少女と悪を象徴する敵たちの間から生まれたものは、最初は不確かであるが、「思想」を残していく確固とした「一つの姿」へと成長していく。その存在の成長過程と性質そのものは、光、水、風のイメージによって表現され、まるで「理想美」(Intellectual Beauty)の影のように、不確かで流動的な性質の中に真理を確証する存在として描写されている。また、この中に愛を象徴する「明けの明星」、すなわち金星(Venus)までが登場していることもシェリーらしさが伺えるところである。この部分が終わると、詩の言説は、寓意的なペーレントを描いていた物語的な言説に逆戻りする。しかし、それはたった2連(126-134)という長さである。そこでは平伏する群衆、落ち着いた面持ちで歩いている少女「希望」、そして土塊のように倒れて死んでいる「無秩序」が淡々と描かれ、「無秩序」に仕えていた殺人者たちも「死の馬」の蹄によって碎き潰されている。つまり、詩の冒頭とはまったく反対の構図が一瞬にして生まれたのである。この急な展開には、後に説かれる詩人の理念、すなわち「非暴力による社会改革」が反映されていることはいうまでもない。しかし、シェリーの抒情性による言説が物語的な言説に割って入ったことに対して、詩人に他の意図はあったのだ



ろうか。

さらにこの後、シェリーの抒情性が復活する。しかし、ここで注目すべき点は、先ほどの「一つの姿」の誕生が「物語」における重要な転換期を示している一方で、今回は「新しい言説の生成」という詩のレトリックにおいて極めて重要な転換期を示している点である。それは「イギリスの人々よ」（147）から始まる言説の生成過程を表現するものである。

雲や壮麗な輝きの迫ような光が、  
 覚醒させるも優しい感覚が  
 聞こえ、また感じられた。そして、それらが消えるとき  
 歓喜と畏怖の言葉が生まれた…（135-138）

この共感覚に満ちた新しい言語の誕生は、クリステヴァ（Julia Kristeva）の用語を借りるならば、セミオティック（原記号態）的な音からサンボリック（記号象徴態）的な言語へと形成されていくという詩的言語の生成を描いているようである。<sup>(17)</sup> さらに続く比喩表現、つまり人々の血に染まって憤慨した母なる「大地」が、産みの苦しみをもってその血一滴一滴を「逆らうことのできない発話」に変えていくという表現は（139-146）、これから展開する言語が既成の通俗的な言語ではなく、預言的な詩的言語であることを見事に表現している。支配的な政治的言説やキリスト教的言説は、詩人シェリーの最も嫌悪するものである。<sup>(18)</sup> この「歓喜と畏怖の言葉」の誕生は、「一つの姿」の誕生以上に重要な意味を持っていると筆者は考える。なぜなら、寓意的なページェントによる物語はもはや語られることはなく、ここから新しい言説による民衆への訴えが詩の最後まで続くからである。しかし、ここでも「一つの姿」が誕生する場面と同様の疑問が生じる。つまり、民衆を読者として想定した詩の中にシェリーの抒情性を挿入することの意味である。

たしかに、仮面のページェントと民衆への訴えとの間にシェリーの抒情性が挿入されたことは、シェリー自身にとって重要な意味があったかもしれない。前述したとおり、詩の後半で展開される言説を通俗的な言説から区別し、預言的な色彩によって神聖化することが考えられる。しかし、民衆という読者を想定する以上、（詩的言説ではなく）社会的言説、しかも平坦で理解しやすい表現によってこの詩を書かなくてはならなかったのも事実である。それは『鎖を解かれたプロメテウス』の対極にある詩を意味してい

(17) クリステヴァの理論によってシェリーの詩を分析した論文に、拙論「シェリーの詩における「死」の動性——『理想美に捧げる讃歌』から『モン・ブラン』へ」、『飛翔する夢と現実——21世紀のシェリー論集』日本シェリー研究センター編（英宝社、2007年）がある。

(18) 1816年執筆の詩「モン・ブラン」（“Mont Blanc”）で「欺瞞や苦悩の広範な法典」（80）と表現される言説である。

る。『民衆のための歌集』に収録される予定だった「イギリスの人々に寄せる歌」はその典型である。) またシェリーは、『鎖を解かれたプロメテウス』が「改革の直接的な強要」を目的にして書かれたわけではなく、「説教的な詩は私が嫌悪するものである」<sup>(19)</sup>とその序文の中で言っている。ところが、『無秩序の仮面』の後半で展開される言説は、『鎖を解かれたプロメテウス』に見られる詩的なフィルターがなく、まさに「改革の直接的な強要」や「説教的な詩」が体現されているのである。政治家とは異なった方法論(つまり詩によって人々を啓蒙し覚醒させること)をもって民衆に改革を促すという理念を持つ詩人にとって、政治的なパンフレットや演説とは違ったレトリックが展開できないという事態が起こってしまった。ここに詩人シェリーの葛藤を見ることができる。妻メアリーも、「高度に想像力に富むスタイルを理解し感じることができない人々の理解力に合わせて」書こうとし、それによって「いつも足枷を掛けられる」<sup>(20)</sup>夫を直に感じていた。通俗的な言葉によって真理を説くことを嫌悪する詩人にとって、民衆に理解できる言語を詩の言語として運用することはジレンマ以外何ものでもなかった。シェリーの抒情性、すなわち「一つの姿」と「歓喜と畏怖の言葉」が誕生する場面は、「民衆を対象にした詩を書く」という目的を自ら打ち立てたにも関わらず、詩人としての理念がそれに完全に妥協することを拒んだ産物だといえる。

#### IV

「歓喜と畏怖の言葉」は民衆に向けられる。その民衆とは、マンチェスターで改革運動を起こした階級、すなわち老若男女を問わず、権力によって搾取され苦しみ続ける労働者階級の民衆である。

眠りから覚めた獅子のように起き上がれ  
打ち負かされることのない数をもって、  
つながれた鎖を大地へと振り落とせ  
眠っているときに降り注がれる露のように、  
汝らは多く、彼らは少ない。(151-155)

「獅子のように起き上がれ」(“Rise like Lions”; イタリックは筆者)という力強い母音韻から始まる言説は、頓呼法によって読者に直接的なメッセージとして伝達され、それはまるで「カリスマ的な指導者」<sup>(21)</sup>による演説のように感じられる。民衆を先導する

(19) *Poetry and Prose* 209.

(20) メアリーによる1819年に書かれた詩の注 (Percy Bysshe Shelley, *Poetical Works*, ed. Thomas Hutchinson [Oxford: Oxford UP, 1970] 588) 参照。

キャラクターを詩の中でオーバーラップさせたいという意図がこの演説的な言説にあるかもしれない。もちろん、そのモデルを詩論『詩の擁護』(*A Defence of Poetry*)の中で「詩人は世界の未公認の立法者である」<sup>(22)</sup>と主張する詩人シェリーと取ることもできる。しかし、シェリー本人の中では、演説の妙で名を馳せた政治活動家ヘンリー・ハント(Henry Hunt)がモデルとしてイメージされていたのかもしれない。彼はまさにマンチェスターの集会で改革を訴える演説を行い、ピーターラーの虐殺を招いた人物であった。1819年9月21日、ピーコック宛の手紙の中でシェリーは、拘束された演説者ハントについて「すべての事において大いなる精神と冷静さで行動したと思う」<sup>(23)</sup>と言っている。シェリーにとって、民衆を改革へと導く演説者の役割は、「未公認の立法者」たる詩人の預言者の役割に通ずるものがあったかもしれない。そもそも、生成された「歓喜と畏怖の言葉」を発話しているのは一体誰なのかという議論がある。これまでの研究では、たとえば「熱狂した少女」(「希望」)、「一つの姿」、「大地」、さらには「1819年のイギリス」に登場する「栄光の幻影」などがその発話者として主張されている。しかし筆者は、発話者を詩に書かれている通りに曖昧にさせておくジョーンズやキーチの考えに賛成である。<sup>(24)</sup>最も重要なことは、たとえ発話者が詩の中で不確定であっても、預言者のな雰囲気を持つ演説的な言説を展開することが『無秩序の仮面』において不可欠なファクターだったということである。

生成された言葉、すなわち演説的な言説による言葉は「自由」の定義を試みようとする。その中で、過剰な金銭や食料を得た支配者達と不当な労働や飢餓の問題を抱えた民衆の存在を対比することによって、搾取する側とされる側の構図が示されている。<sup>(25)</sup>また、搾取されている労働者階級を啓蒙するため、詩人はあるレトリックを展開する。「自由」を定義するために、まずその対立の概念である「隷属」が定義され、7回にわたる「それは(隷属とは)~することである」という表現によって語られるのである(156-208)。先ほど述べたように、シェリーは既成の言説による支配に対して否定的であり、記号化した言語の恣意性を否定する。「自由」という崇高な概念が「迷信、そして噂の洞窟から反響する名称」(215-216)によって表現されたとき、その言葉は「欺瞞や苦

(21) Steven E. Jones, *Shelley's Satire: Violence, Exhortation, and Authority* (DeKalb: Northern Illinois UP, 1994) 100.

(22) *Poetry and Prose* 535.

(23) *Letters* 2: 120.

(24) Jones 111 並びに William Keach, "Rise Like Lions?: Shelley and the Revolutionary Left," *International Socialism* 75 (1997), accessed February 25, 2012. <http://pubs.socialistreviewindex.org.uk/isj75/keach.htm> 参照。

(25) シェリーはジェントリ(地主階級)の出身であり、マルクス(Karl Marx)の定義ではオーウェン(Robert Owen)のような空想的社会主義者に当てはまる(例えば、マルクス・エンゲルス、『共産党宣言』[大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、2007年]19-20頁参照)。しかし、この詩の資本主義の台頭を危惧した内容は、非常にマルクスのである。このときシェリーは、封建的な格差ではなく財政上の格差にイギリス社会の問題があると考えていた。1819年9月9日、ピーコック宛の手紙(*Letters* 2: 119)参照。

悩の広範な法典」に堕してしまう恐れがある。そこでシェリーは、言葉に対してあたかも正確なシニフィエを有しているものとして「到達する」のではなく、「接近しよう」と試みる。ここにシェリーの抒情性とは違ったシェリーらしさを見ることが出来る。また、「～することである」(傍点は筆者)という言い回しから分かるように、隷属という概念を(名詞ではなく)動詞による「行為」によって定義していることに注意しなくてはならない。「行為」による定義づけは、「隷属」をより現実的なものとして民衆に実感させる効果を持っているからである。このような「隷属」の定義づけ(「自由」への接近)があることによって、この後で語られる「自由」そのものの定義(209-260)を民衆に受け入れやすくさせているのではないだろうか。

## V

『無秩序の仮面』における言説の変移は最終段階へと至る。すなわち、詩の約3分の1を占める260-372行である。この詩に影響を受けた読者が最も魅力的な部分と位置づけるのはおそらくこの箇所であろう。

…言葉ではなく行動によって  
汝(「自由」)の卓越した美しさを表現させよう。(260-261)

詩という言葉によって社会改革を試みるシェリーは、ここであえて言葉の否定を宣言する。しかし、それは根本的な言葉の否定を意味するものではない。これから語られる言葉が(『鎖を解かれたプロメテウス』執筆の趣旨がそうであったように)読者に改革の思想を吹き込むことだけに止まらず、実際的な改革の行動へと促そうとする、いわば言葉=行動という意味合いを帯びるのである。

巨大な集団を存在させよう、  
そして偉大なる荘厳さをもって  
韻を踏んだ言葉で宣言しよう  
神が汝らを作ったように、汝らは自由であるということ。(295-298)

この「力強くかつ飾り気のない言葉」は、刀のように鋭く、盾のように自らを守る行動となって具体化される(299-302)。このような言葉の行動化が示すものは、シェリーのパフォーマンスな言説に対する願望である。この特徴は彼の他の詩ではほとんど見られることがなく、「民衆」という読者を対象にした『無秩序の仮面』の最大の特徴であろう。ここで説かれるのは非暴力・不服従による「消極的抵抗」(passive

resistance) である。「消極的抵抗」は、『無秩序の仮面』のすぐ後に書かれた『改革の哲学的考察』(*A Philosophical View of Reform*) の中でも論じられている。そこではピーターラーの虐殺についても言及されており、いわば『無秩序の仮面』の散文化といってもよい。<sup>(26)</sup> いずれにしても、詩の最終段階は、たとえその内容が「消極的抵抗」だとしても、実際の改革の行動を積極的に駆り立てる力を持っている。いくつかの言説の変移によって展開されてきた『無秩序の仮面』は、テキストの延長線上にある行動の実現を最後に要求する。現代の読者からすれば、それは20世紀のインド独立運動やアメリカ合衆国での公民権運動を連想させるだろう。演説的言説による行動の喚起は、詩が民衆と一体化するというシェリーの究極の願望を意味しているのである。

最後に付け加えておく点がある。それは『無秩序の仮面』における「眠り」の持つ意味である。もし、眠りを表す言葉“asleep” (1), “slumber” (151), “sleep” (154) を起点と考えるならば、イタリアで眠っている「私」(シェリー) が眠れる獅子である民衆と連結され、「私」が「ヴィジョンを歩く(詩を書く)」という行為は民衆が「行動する」という行為へと並列されていく。すると、「私がイタリアで眠っているときに」という『無秩序の仮面』の最初の行は、詩を読み終えたときに別の意味としてフラッシュバックされるのである。

## 結

『無秩序の仮面』が出版されたのは、シェリーの死の10年後、すなわち1832年である。<sup>(27)</sup> シェリーの期待に反して詩がすぐに出版されなかった理由は、当時の厳しい検閲にある。出版者のリー・ハントは、(たとえ『イグザミナー』誌がリベラルな思想を掲げる雑誌であっても) この詩を掲載して当局の目に触れることを恐れていた。また、彼は当時の民衆がこの詩を誤読し、(シェリーの意に反した) 誤った行動を取るのではないかと考えていた。つまり、王室や議会に対する批判的な表現と民衆を行動へと扇動するパフォーマンスな言説が出版を不可能にしたのである。結局、1832年の第1次選挙法改正を受けて『無秩序の仮面』が出版される結果となったわけである。

生前、読者による共感や評価に恵まれなかったシェリーであったが、彼の多くの詩がそうであるように、後に『無秩序の仮面』は彼の代表作の一つとして評価されるようになる。しかし、それは単に「エリート層の知的な読み物」という枠組みの中に止まったのではない。チャーティスト運動、インドを独立へと導いたガンディー (Mohandas

(26) Percy Bysshe Shelley, *Shelley's Prose or The Trumpet of a Prophecy*, ed. David Lee Clark (Albuquerque: U of New Mexico P, 1954) 257参照。この論文では、民衆を先導する人物を「真の愛国者」と表現している。

(27) 『民衆のための歌集』に収録される予定だった「自由に寄せるオード」と「西風に寄せるオード」は、『鎖を解かれたプロメテウス』と共に1820年に出版され、対象となる読者の設定という点でシェリーの意図と矛盾した結果となってしまった。

Karamchand Gandhi) の思想, そして天安門事件で犠牲となった学生の信念にまで影響を与えるというパフォーマンスなテキストとして受容されたのである。シェリーの伝記作家ホームズも『無秩序の仮面』を「これまで英語で書かれた中で最も偉大な政治的プロテストの詩」<sup>(28)</sup> と言っているのもその理由であろう。そういう意味でも、『無秩序の仮面』はシェリーの詩の中でも特異な位置づけとなっている。しかし, 社会改革の理念のみならず, 自分が理想とする詩の表現方法と「民衆」という読者を考慮した表現方法とが複雑に絡み合うことによって, 寓意的ペーजेント, シェリーの抒情性, 演説的言説, そしてパフォーマンスな言説という言説の変移を生み出した点においても, 『無秩序の仮面』は特異な性質を持った詩であるかもしれない。

---

(28) Holmes 532.